

# Significance of Measurements of Peripheral Carbonyl Stress Markers in a Cross-sectional and Longitudinal Study in Patients With Acute-stage Schizophrenia

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2015-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 勝田, 成昌 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2001654">https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2001654</a>

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 1557 号

## Significance of Measurements of Peripheral Carbonyl Stress Markers in a Cross-sectional and Longitudinal Study in Patients With Acute-stage Schizophrenia

(急性期の統合失調症におけるカルボニルストレスの縦断的な関連研究)

勝田 成昌 (かつた なりまさ)

博士 (医学)

### 論文審査結果の要旨

本論文は、カルボニルストレスを反映する血液中の終末糖化産物ペントシジンと、それを消去するビタミンB<sub>6</sub> (ピリドキサル) を、統合失調症の急性期と寛解期のそれぞれについて測定し、臨床症状や遺伝子との関連性を含め、横断的かつ縦断的な面から観察することで、診断的及び治療経過的バイオマーカーとしての可能性を検討したものである。方法として、今回入院した 137 例の急性期統合失調症の患者を対象とした。健常者対照群は 47 例で、DSM-IV の I 軸診断の精神疾患に該当しないことを条件とした。結果として、急性期のペントシジン濃度は統合失調症群と健常対象群で有意差は無かった。また、統合失調症のうち 14 例ではペントシジン濃度が異常高値 (健常者群の平均値より +2SD 以上) であったが、その群では先行研究のように重症度に差はなかった。しかし、ペントシジン濃度は抗精神病薬の 1 日投与量と有意に相関していた。また、ピリドキサールの値は健常者群と比較して、統合失調症群では有意に低下しており、治療後に有意に上昇していた。さらに、ピリドキサールの値が入院中に逆に低下した 18 例を注目したところ、その患者群は低下率が強いほど、薬物治療に反応が乏しく、症状の改善が少なかったことが示された。カルボニルストレスのバイオマーカーであるペントシジンとピリドキサルを統合失調症において、横断的かつ縦断的に評価を行い、結果としてピリドキサールの測定が治療反応性との関連性がある可能性を初めて明らかにした臨床的に意義ある論文である。

よって、本論文は博士 (医学) の学位を授与するに値するものと判定した。